

# 巻 頭 言

群馬パース大学大学院保健科学研究科医療科学領域教授 / 同附属研究所先端医療科学研究センター長

木村 博一

言うまでもなく、日本は地震、台風、豪雨などの自然災害が頻発する国であり、その度に被災地では諸課題が顕在化してきた。しかし、これらの課題は、依然として十分に解決されておらず、災害の度に繰り返し問題化している。

このような背景から、本特集号では、災害に伴う感染症を主体としたリスクとその対策を多角的に論じる7本の論文を第一線の専門家に論じていただいた。

まず、自然災害後の感染症に対する健康危機管理をイタリアと日本の比較から俯瞰し、国際的な知見の共有をはかった。続いて、災害時に留意すべき感染症と感染対策、コンパニオンアニマル由来の感染症といった現場で直面する具体的課題を取り上げた。さらに、災害食の在り方や自然災害時の医療体制を通じて、被災者の健康維持と支援体制整備の重要性を強調した。また、災害発生後の中長期的視点から感染制御とワクチン対策を論じ、避難所のトイレや手指衛生といった生活環境衛生の根幹に迫った。

本特集号は、発災前から発災後に至るまでの災害時の公衆衛生対策を俯瞰し、食と住を基盤とした災害時の多層的課題と方策を提示したと思う。特に避難所における集団生活は、衛生環境の悪化や慢性的なストレスと相まって、感染拡大の温床となり得る。これを防ぐには、行政、医療従事者、研究者ならびに地域住民が一体となった包括的な取り組みが不可欠である。本特集に収められた論考が災害前後の対応のみならず、長期的な公衆衛生戦略の在り方を見据えた実践的提案となることを期待したい。